父は人と仲良く酒を呑むのが好きである。仲の悪い村同士の争いごとには、いつも身銭を切って仲介していた。父には人としての些細な損得関係は蔑視している。
　だが、なかなか口に出して言うことはない。普段は寡黙で口が堅い。何かあったらお呼びがかかってくる。父はまわりから好かれていた。私とはまるで違うのである。
　父は無理なく自然に構えていたのだ。そういう風に自分を仕向けていたのかもしれない。村の行事では酒豪ではあったが、家では煙草以外、酒や賭け事は一切やることはなかった。
あの、中国残留孤児たちの一件にしても、自分を通そうとしていたのかもしれない。角が丸くなったのは、私が東京に来てからである。
　郷里の実家では、父と母が笑顔で待っていた。
「かあちゃん、煙草と酒、買ってきてくれや」
　祖母がなくなり、しばらく沈んでいたが、今はいつもの父に戻っていた。
「俺、ちょっと墓の掃除にいってくる」
　お盆には富良野へ行っていたから、この日は久しぶりに、祖母と話しをしたかったのである。
「ばあちゃん、喜んでだろ？」
「ああ、そんだね」
「まぁ、呑めや」
　父は最近、胃の調子が良くないようだ。病院が嫌いで、これまで一度も行ったことはなかった。母や弟の話しだと、全身に腫瘍が転移していると医者から告示されていたらしい。
　おそらく、もっても、あと一年と言われていた。知らないのは父だけのようだったが、おそらく本人は、分かっているはずである。
　祖母が亡くなってからも、中国の家族からの音信はなかった。本当の姉妹から、来ているかは知らない。自分にとっても禁句のはずであった。
堀部夫妻との約束もある。私は、気持ちを押さえていた。
「中国の人みんなどうしてるん？」
　しばらくして、酔った勢いで思わず私は口を滑らしていた。しまったと気づいた時はすでに遅かった。
本当の姉妹のことを、言ったつもりではなかったのだ。
私は苦笑していた。父は、先に来た姉妹のことを、聞かれたと思っていたのだろう。両方の姉妹の記憶を胸に抱きながら。
ここで私が全てを打ち明けたら、父はどういう態度を取るだろうか。
　もしそうだとしても、父は笑って軽く受け流すことだろう。とぼけた顔をしても、何も言わない。そういう光景がふと浮かんでいた。
「孝、眼が真っ赤だよ。どうしたばさ？」
母は勘の鋭い人である。
「いや、ゴミに眼が入ってね」
「まだ、変なこど言う」
母が笑った。久しぶりのにこやかな表情である。たしかに私は、また父の背中を見ていた。記憶が水とともに海に流れるように思えた。私の疑念はすでに雪解けをしていた。父の胸の内が、分かるような気がしていたのである。私が知っていることは、父は知らないほうがいいと願っていた。父の従姉妹への深い想いが壊れないように。そっとしてあげるのもいいかなと気を遣っている自分に気づいていた。
父は私がその姉妹の事については、知る由もないという、安堵の表情をしているようである。
　私は父が一瞬、何かを思い出したように感じた。しばらく沈黙が続いていた。
煙草の煙が父の涙を覆っているように見える。だが父は笑顔で酒を注いできた。
「便りなんかねぇさ。みんな元気そんだよ。あぁ、たぶん元気…」
父の横顔が遠くの空を仰いでいた。これが父とは最後の一献になった。